

## 日本語・日本事情教育部門

1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース
2. 短期留学プログラム日本語コース
3. 全学向け日本語コース
4. 日本語能力試験対策講座
5. 共通教育科目・日本語日本事情科目

## 1. 日本語研修コース及び日本語研修特別コース

### 《全体概要》

2011年度、日本語研修コースでは、教員研修留学生2名を受け入れた。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語力及び研究を行う上で必要な基礎的な日本語を習得することである。文型・文法10コマ（1コマ：90分）を基本として、会話、漢字、作文、情報処理、文化、修了発表指導の各技能クラスがある。コース修了時の修了発表会では、各学生がスライドを用いて日本語によるスピーチを行う。修了発表の各受講者のスピーチのテーマは以下の通りである。

### <11期 2011年度後期>

ガザーヤ高校とわたしのしごと                      ナキボネカ・ルシア（ウガンダ）  
わたしがっこうーバンケン教育大学              プッタチャン・ラサヴォン（ラオス）

### 《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
2	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
3	日本語 (情報処理)	日本語 (作文)	日本語 (漢字)	日本語 (会話)	日本語 (修了発表指導)
4			日本語 (文化)		

以下に、各クラスの概要をまとめる。なお2011年度、日本語研修特別コースは開講されなかった。

### 《日本語（文型・文法）》

【受講者】2名（非漢字系2名）      【授業時間】10コマ／週      総コマ数：134コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）、澤崎幸江、敷田紀子

#### 1) 目標

留学生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。（『みんなの日本語初級』第1～25課）

#### 2) 方法

##### (1) 授業の進め方

- ・ 1限目のみ、全学日本語コース「日本語Ⅰ」と合同である。1限は『みんなの日本語初級』に添って学習し、2限は1限の学習項目の定着と応用を図った。原則として2日（4コマ）で1課を終了した。1限の学習内容については、全学日本語コース「日本語1」を参照のこと。
- ・ 2限目は、語彙クイズ、文型作文、文ディクテーション、中作文を継続して行い、特に学

校・教育関係の語彙の定着を目指した。後半はロールプレイや、自国での教師生活に関わるトピックでディスカッションを行った。

(2) 成績・評価

中間テスト(15%)と期末テスト(85%)で、最終成績60点以上を合格とする。合格者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格の者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

3) 評価と課題

- ・ 全学日本語コースとの合同授業では、活発な練習活動が実施できた。
- ・ 修了発表を意識し、学校・教育関連語彙の拡充を図る練習は非常に有効であった。
- ・ 『みんなの日本語初級』25課までの学習で修了発表に必要な文型をどのように補充するかが、今後の課題である。(桑原陽子)

《日本語（情報処理）》

【受講者】2名 【授業時間】1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】桑原陽子

1) 目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

2) 方法

情報処理センターの端末を使用し、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員作成のプリントである。修了発表資料を評価対象とした。

3) 評価と課題

学習者に基本的な PC 操作の知識があったため、スムーズに学習が進められた。

(桑原陽子)

《日本語（漢字）》

【受講者】2名（非漢字圏2名） 【授業時間】1コマ/週 総コマ数：13コマ

【担当教員】山中和樹

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』を使用して、漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～10の112漢字、161漢字語を習得する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 原則として1コマ1ユニットで進んだ。ただし、最初の2コマで漢字の識別、成り立ち、ベーシックストロークについて学習した。3コマ目から10～14字ずつ漢字を学習した。
- ・ 授業では、漢字の成り立ちから説明し、テキストの漢字の読み・書き練習を行ったが、画数の多い漢字はもっぱら読みの練習を行った。

(2) 復習クイズ

- ・ 毎回、漢字フラッシュカードを使用し、学習済みの漢字の読みを繰り返し復習した。その

直後に、各ユニットの復習クイズを実施した。主に文中における漢字語の読みをひらがなで書く問題を出題したが、数と数に関連する語の漢字の書き問題も出題した。

(3) 成績・評価

- ・ 毎回のクイズ(20%)＋期末テスト(80%)をもとに総合的に評価した。

3) 評価と課題

- ・ 参加学生2名はすべて非漢字圏であったが、いずれも漢字に興味を持ち、積極的に漢字学習に取り組んだ。
- ・ 教師が板書することを、漢字のなりたちを示すイラストも含め、すべて書き写す(母国での習慣と思われる)学生がいたので、例年どおりの速度では進めず、ユニット8までで終了した。基本的な漢字の読みはほとんど問題がなく、期末試験でも全員、優秀な成績をあげた。

(山中和樹)

《日本語(作文)》

【受講者】2名(非漢字圏2名) 【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ

【担当教員】今尾ゆき子

1) 教科書および授業の目標

- ・ ハンドアウト(単文作成問題、モデル文、関連語彙等)
- ・ 5つの課題を設定し、課題作文をもとに修了発表のためのレポートを作成する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 授業の始めに修了発表のテーマを大まかに決めて、課題作文の集大成が修了発表および修了レポート作成となるように、5つの課題を設定した。
- ・ 修了レポートは冬休み前迄の10回で作成することを目標とし、5回目迄は主として表の作成、6回～9回で文型・文法の授業において導入済みの既習文法・語彙を用いた文章作成を行った。
- ・ モデル文を参考に短文作成練習の後、課題作文の作成とワープロ打ちを宿題とした。
- ・ 課題作文はメールで添削。次回の授業で各自作成した文章を読んで、内容把握と表現や誤字の修正を行った。
- ・ 第10回目(冬休み直前)に、5つの課題作文をまとめて修了レポートを作成し、1月から個別指導。
- ・ 課題作文 1. 自己紹介  
2. わたしの学校 (1)(2)  
3. 学校の行事  
4. わたしのしごと (1)(2)  
5. わたしの国・わたしの町

(2) 成績・評価



課題作文(50%)＋修了レポート(50%)

### 3) 評価と課題

- ・ 出席は2名とも皆出席。
- ・ 文型・文法クラスが全学向けコース日本語 I との合同授業であることから、4つの課題作文を終える12月初めに、ようやく「て形」導入となる。こうした状況下にあつて、作文の授業で使用可能な文型に限られることに加えて、受講者は既習文法・語彙の定着が不十分であつた。その結果、5回までの授業は単語だけを記載する表の作成に専念せざるを得なかつた。
- ・ モデル文を用いたQ&A方式の単文作成練習において、受講者は英文の提示に終始し、既習の文型・語彙を用いて日本語の文を作成しようとする姿勢が見られなかつた。また、既習漢字がほとんど読めず、文章作成にあたり漢字の使用はなかつた。
- ・ 文章作成は文型・文法および語彙(漢字を含む)の導入と定着が大きく関係する。したがつて、各日本語科目の習得状況に応じて修了レポートの内容を修正する必要がある。

(今尾ゆき子)

## 《日本語(会話)》

【受講者】2名(非漢字圏2名) 【授業時間】1コマ/週 総コマ数:13コマ

【担当教員】中島清

### 1) 目標

指導教員等との意思疎通を行うために必要な会話力、また、地域社会での生活・交流に必要な会話力を習得させることを目標とする。そのため、「みんなの日本語」の語彙・表現範囲に拘らず、必要とされる語彙表現を柔軟に提示する。

### 2) 授業方法

① 作文用テーマを15題提示し、毎週1テーマずつ作文を宿題として課す。② 授業では毎回、全員が作文に基づき日本語で発表を行い、その発表内容に関して、他の学生が質問しながら、会話を展開させる。作文は添削して返却する。③ その後、「みんなの日本語」各課5問の即答練習を行う。④ 最後に、日本の歌を紹介するか、又は「新日本語の基礎」の復習ビデオを使って、より自然な会話を学ぶ。

### 3) 成績・評価

- ・ 成績評価割合 期末テスト 100点(即答問題50点、テーマ発表50点)  
毎週提出作文50点
- ・ 期末テスト内容
  - ①即答問題 : 質問文20問を予めテープに録音しておく。各問解答時間は約10秒。録音済テープを流し、別のテープレコーダーでQAともに収録・採点する。
  - ②テーマ発表: 学期期間中に発表した12のテーマの内、各2テーマが記載してある6枚のカードを用意し、その中から抽選で1枚選んでもらい、カードに書いてある2つのテーマから1題を選び、そのテーマについて1分考えた後3分発表、2分質疑応答をして評価する。

#### 4) 評価・課題

- ・ 留学生センターの教室は狭く、窮屈な雰囲気か否めないで、より開放的な雰囲気かで会話ができるよう、ラウンドテーブルがあり、かつ広々としたラウンジを教室として使ったが、それはよかつた。
- ・ 全員社会経験が豊富であり、授業態度もよく、真剣に取り組んでた。また、作文の内容も豊かで、楽しい雰囲気かで授業かできた。
- ・ 語学的なセンスはとても良くて構文への興味も高かつた。

#### 《日本語（文化）》

【受講者】 2名（ウガンダ1名、ラオス1名） 【授業時間】 1コマ/週 全13コマ

【担当教員】 膽吹覚（コーディネーター）、廣谷幸子（華道）、柳原智子（陶芸）

##### 1) 目標

華道、陶芸、茶道について、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

##### 2) 授業内容

(ア) 華道（池坊福井中央支部）：8コマ

第1回から第5回までは自由花。第6・7回は生花新風体。第8回は生花正風体。第9回は修了発表会会場に各自が自由花を生けて、このクラスでの学習成果を発表した。今回から池坊のテキストが改正されたので、新たに『池坊自由花入門カリキュラム』を使用した。なお、授業では作品をセンター1階に展示し、終わった作品（花）は使えるものとそうでないものとに分類し、花を慈しむ心を大切にすることを指導した。

(イ) 陶芸（越前焼）：3コマ

第1回と第2回は陶芸の道具の使い方など、陶芸の基礎を学んだ上で、中皿と湯飲み茶碗を製作した。第3回と第4回は、前回の授業を受けて、花器と茶碗を制作した。また、全課程を通じてランプ作成にも取り組んだ。

(ウ) 茶道（2コマ）

福井市の愛宕坂茶道美術館主催の外国人を対象とした茶道教室に参加した。

##### 3) 評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合してコーディネーターが判定した。受講生はおおむね意欲的に取り組んでたようである。今回、初めて茶道を取り入れることができたが、これは愛宕坂茶道美術館の特別事業に参加させていただいたもので、今後も美術館が継続的に続けていただけることを希望している。なお、今期は書道の講師が見つからず開講できなかったため、来年度までに後任の講師を依頼するつもりである。 (膽吹覚)

《コース全体についての課題》

2011年度は2名で、全学日本語コースといっしょに学習することの効果が大きかった。文法クラスの進度の遅さを補うために、引き続き補助教材の整備を行っているが、次年度はそれを作文との連携させられるようにすることが課題である。

(桑原陽子)

## 2. 短期留学プログラム日本語コース

### 《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムAコースの学生が共通科目として受講する日本語コースで、日本語・日本事情系科目10単位、伝統産業系科目2単位が必修である。

2011年前期は、2010年度に受け入れた留学生20名が日本語科目（「日本語初中級1」「日本語初中級2」「日本語中級」「日本語上級」、「はじめての作文」「はじめての会話」）および日本事情科目（「日本事情2」「日本の文化」「応用日本語2」）を受講した。

2011年後期は、2011年度に受け入れた留学生13名が日本語科目（「日本語初級1」「日本語初級2」「日本語初級3」「日本語中級」）、日本事情科目（「応用日本語1」）および「伝統産業1」を受講した。

### ① 2011年前期

#### 《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初中級1	膽吹覚、市村葉子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	5
日本語初中級2	桑原陽子、市村葉子 酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅱ』	7
日本語中級(日本語A)	桑原陽子	プリント	1
日本語中級(日本語C)	山中和樹	プリント	1
日本語上級(日本語E)	膽吹覚	『留学生の日本語③論文読解』	4
日本語上級(日本語G)	今尾ゆき子	『日本語上級読解』	4
はじめての漢字	今尾ゆき子	『みんなの日本語初級Ⅰ漢字 英語版』	0
はじめての作文	山中和樹	『みんなの日本語初級やさしい作文』	1
はじめての会話	山中和樹	『みんなの日本語初級Ⅱ』	6
日本事情2	膽吹覚	『越前若狭いろはかるた』	1
日本の文化	膽吹覚	プリント	2
応用日本語2	山中和樹	プリント	3
多文化コミュニケーション2	山中和樹	プリント	0
多文化コミュニケーション3	桑原陽子	プリント	0
伝統産業2	中島清	プリント	0

## 《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本事情 2		日本の文化	
		多文化コミュニケーション 3		多文化コミュニケーション 2	
2限	日本語初中級 1	日本語初中級 1	日本語初中級 1	日本語初中級 1	
	応用日本語 2				
3限		はじめての漢字	はじめての作文	はじめての会話	
		日本語中級(A)			
		日本語上級(E)			
4限	日本語初中級 2	日本語初中級 2	日本語初中級 2	日本語初中級 2	
		日本語中級(C)			
		日本語上級(G)			

## 《受講者数》

科目	国名	中	イ	フ	ア	韓	合
		国	ン	ラ	メ	国	計
			ド	ン	リ		
			ネ	ス	カ		
			シ		合		
			ア		衆		
			シ		国		
			ア				
日本語初中級 1		4	0	1	0	0	5
日本語初中級 2		7	0	0	0	0	7
日本語中級(日本語A/日本語C)		0	0	0	1	0	1
日本語上級(日本語E/日本語G)		2	1	0	1	0	4
はじめての漢字		0	0	0	0	0	0
はじめての作文		1	0	0	0	0	1
はじめての会話		6	0	0	0	0	6
日本事情 2		0	0	0	1	0	1
日本の文化		0	0	0	1	1	2
応用日本語 2		2	0	0	1	0	3
多文化コミュニケーション 2		0	0	0	0	0	0

科目 \ 国名	中 国	イ ン ド ネ シ ア	フ ラ ン ス	ア メ リ カ 合 衆 国	韓 国	合 計
多文化コミュニケーション3	0	0	0	0	0	0
伝統産業2	0	0	0	0	0	0
小計	22	1	1	5	1	30

## 《授業報告》

### 1. 日本語初中級1

- ・ 受講者：5名（中国4名、フランス1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：60コマ
- ・ 担当教員：\* 膽吹覚、市村葉子、村上洋子（\*コーディネーター）

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）  
『みんなの日本語初級Ⅱ文法解説』（同上）
- ・ 初中級の日本語の文法、語彙を学び、応用練習する。
- ・ 日本の社会生活、日常生活を理解し、コミュニケーションができるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

2コマで1課のペースで進めた。授業は文型の導入と定着を中心とした。具体的には語彙を導入した後で、練習A・B・Cを行った。理解の困難な文型については『書いて覚える文型練習帳』を用いて、その理解と定着を図った。会話はこのクラスではしなかったが、毎回1人ずつ1分間スピーチを担当させて、会話能力の向上を図った。宿題は短文作成プリントと教科書の問題の部分を課した。

##### (2) 小テスト

L26-30、31-35、36-40、41-45の計4回実施した。

##### (3) 成績および評価

期末試験（80%）、小テスト（20%）の配分で判断した。

#### 3) 評価と課題

- ・ 非漢字圏の学生が1名いたが、本人の才能と努力により中国人学生と遜色ない結果を出してくれた。今回のクラスは受講生の学習意欲が高く、文型導入もスムーズであった。1分間スピーチに対する日本語によるQ&Aも活発に行われた。  
(胆吹覚)

## 2. 日本語初中級 2

- ・ 受講者：7名（中国7名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：61コマ
- ・ 担当教員：\*桑原陽子、酢谷尚子、市村葉子（\*コーディネーター）

### 1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』31課～50課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

### 2) 方法

#### (1) 教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

- ・ 2日で1課終了。「書いて覚える文型練習帳」等の補助教材も積極的に使用した。
- ・ 各課の新出語彙から5語選択し、短作文問題を作成し、宿題とした。

#### (2) 教科書以外の活動：

- ・ 月曜以外の毎日、その日にくじでテーマを決めてそれについて自由に話す「おしゃべりタイム」を設けた。毎回学生1人が会話のまとめ役を担当し、話題を提供したり、学習者どうしの質疑を促したりしながら、3分程度の自由会話をを行った。
- ・ 毎週月曜を「活動」の時間に充て、会話ロールプレイ、メールの書き方、グラフの説明練習など実際のコミュニケーションのための話す・書く練習を行った。

#### (3) 成績評価

- ・ 文法復習テスト（筆記）2回（20%分）＋修了テスト（80%分）

### 3) 評価

- ・ 全員授業態度は非常に良好であった。教科書以外の活動を多く取り入れたことによって、日本語力を大きく伸ばすことができた。教科書を学習でも時間に余裕があったので、さらに生の素材を活用した学習をもっと取り入れることも可能であったと思う。（桑原陽子）

## 3. 日本語中級（日本語A）

- ・ 受講者：1名（アメリカ1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：桑原陽子

### 1) 目標

レポートの書き方を学ぶ

### 2) 教科書

佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子著「中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング」The Japan Times

### 3) 方法

教科書に沿って、レポート執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、練習問題やレポート執筆（2回）の課題を出した。

課題レポート（60点）と提出物・授業態度（40点）を総合的に評価した。

#### 4) 評価

- ・ 他の学習者と比較すると語彙が少なく、漢字については常にサポートが必要であったが、授業態度は非常に良好であった。（桑原陽子）

### 4. 日本語中級（日本語C）

- ・ 受講者：1名（アメリカ1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）
- ・ 速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

1日に1～2課のペースで進化した。まず、黙読により内容把握をさせたあとで、音読により、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

##### (2) 評価方法

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提として、期末試験の成績、授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

#### 3) 評価と課題

この授業は共通教育の「日本語B」との共同授業である。中国からの特別聴講生の日本語読解能力が高く、短プロ生との日本語力が懸念されたため、読解だけではなく、出身国の事情を紹介させるなど、対話も取り入れ、短プロ生が読解以外の能力を発揮できるように工夫した。出席状況もよく、授業態度もまじめで積極的であった。（山中和樹）

### 5. 日本語上級（日本語E）

- ・ 受講者：4名（中国2名、アメリカ1名、インドネシア1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『日常生活の分野別 日本語表現便利帳』（専門教育出版）
- ・ 日本語上級レベルの留学生を対象として、日本語の語彙力・表現力の向上を図る。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法



- ・ 教科書第1章から第3章までを扱った。
- ・ まず語彙を導入、その用法の例文を挙げて示した。その後、教科書のタスクを課すことで、その定着を図った。

(2) 成績および評価

- ・ 期末試験 (100%)

3) 評価と課題

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、このクラスで導入した語彙は定着できたと判断してよいであろう。
- ・ このクラスでは教科書の前半のみを扱ったが、後半は扱えなかった。教科書ではややボリュームが多かったと反省している。
- ・ 語彙の導入・定着と言う単調な授業であったが、受講生からの活発な質問によって救われた感がある。
- ・ 留学生の語彙力不足は専門教育を受けた時に大きな支障をきたす原因となる。工学系の専門教育に対応した語彙力の向上はできないか、今後も検討したい。 (膽吹覚)

6. 日本語上級 (日本語G)

- ・ 受講者：4名 (中国2名、アメリカ1名、インドネシア1名)
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：柿倉侑子他『日本語上級読解』(アルク)、プリント
- ・ 目標：さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

2) 方法

- ・ 1課につき1コマのペースで課題文を読み、単語の意味や指示語の指示内容の確認および文章の構成と内容の把握を行った。2コマ目に「内容の問題」「言葉の問題」を解くことにより文章が理解できたかどうかを確認した。また、Step1の短い読み物やプリント (新聞のコラム等) を読んだ。
- ・ 課毎にテキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5問、要約文 (160字程度) および感想・経験等の文章作成 (160字程度) を宿題とし、添削の後返却した。5課までは宿題の単文作成5問を全員に板書させた。
- ・ 成績評価：レポート (50%)、期末試験 (50%)

3) 評価と課題

- ・ 出席・授業態度は良好。
- ・ 受講者4名とも課題をきちんと提出した成果として、それぞれ語彙力・表現力が格段に向上した。 (今尾ゆき子)

## 7. はじめての漢字

本科目の受講者なし。

## 8. はじめての作文

- ・ 受講者：1名（中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級 やさしい作文』
- ・ 初級の語彙や文法を使って、さまざまなテーマで作文する。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

まず、モデル文を読み、内容を把握し、随時、文法・語彙について説明する。次に作文のポイントに進み、練習問題をやる。最後に、作文する。授業時間内にできないときは宿題とし、次回に提出させる。

- ・ 原則として、1コマ1ユニットで進んだが、最初のユニットは易しいので1コマ2ユニットで進んだ。各課はモデル文の内容解説、教科書の練習問題、「作文メモ」、「書きましよう」（実際の作文）からなっている。

#### (2) 成績評価

- ・ 課題作文提出状況と出席状況・授業態度より総合的に評価した。

### 3) 評価と課題

- ・ 出席・授業態度とも大変良好であった。
- ・ 今回は、中国の学生が1人だけだったので、念入りに指導できた。中国の簡体字と日本の新字体の違いは随時、教えた。 (山中和樹)

## 9. はじめての会話

- ・ 受講者：6名（中国6名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』
- ・ 指導教員との会話、学外での会話において、自分、趣味、専門などについて話せるように表現や語彙を習得する。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

教科書の各課の会話のテープをまず聴き、内容を理解する。その際、教科書は見ないように

する。次に教科書を見て内容を確認する。次に、教科書を見ないで一文ずつ、テープの会話を暗唱する。それから、その課の教授項目の表現を使用して、指導教員や他の学生と自由な会話の練習をする。最後に、ビデオを見て、その課の内容を確認し、終了する。

初めに『みんなの日本語初級Ⅰ』を復習した。初級の初めの方は1日に4～5課扱った。学習が進むにつれて1日教課のペースになった。

### 3) 評価と課題

- ・ 出席状況・授業態度及び期末試験（個別の会話試験）より総合的に評価した。出席・授業態度とも良好であった。出席率はほぼ100%。
- ・ このクラス所属の学生は文法クラスでは2つのクラスに分けられている。一方のクラスの進度が他方よりやや遅れていることもあって、進度が遅い方のクラスに合わせた。しかしながら、予定どおり終えることができた。進度が遅い方のクラスの学生も学力が付いていたので、クラス運営上の支障はなかった。（山中和樹）

## 10. 日本事情 2

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 朝日新聞の東日本大震災関連の記事
- ・ 日本の新聞記事の読解を通して、日本社会に対する知識を広げ、理解を深める。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

- ・ 前週のクラスで新聞記事（原文）、総ルビ付きの文章の2点を学生に配布し、予習を課し、その前提で授業を行なった。
- ・ 授業では学生に記事を音読させ、その後、記事の読解を行なった。読解後は記事に対する意見を求め、発話を促した。

#### (2) 成績および評価

- ・ 期末レポート（100%）

### 3) 評価と課題

- ・ トピックが東日本大震災ということもあってか、受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末レポートでも記事に基づいて各自の意見が述べられていた。
- ・ 新聞記事を教材とする場合、トピックが最大の問題となる。今回のトピックは受講生も納得のいくものであり、かつ興味深いものであった。今後もトピックの選択に十分な注意を払いたい。（膽吹覚）

## 11. 日本の文化

- ・ 受講者：2名（米国1名、韓国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ かるた各種
- ・ かるたを通じて、日本文化に対する興味関心を高め、理解を深める。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

- ・ 江戸いろはかるた、上方いろはかるた、百人一首、越前若狭いろはかるた、を教材として選び、日本人の思想、モラル、恋愛観、自然観、福井県の文化について、実際にカルタを使ったゲームを通して、理解を図った。

#### (2) 成績および評価

- ・ 期末レポート（100%）

### 3) 評価と課題

- ・ かるたを使って留学生向けの授業はできないか、という発想から始めた試作的授業であったが、おおむね受講生の理解は得られたと思われる。もちろん、ゲームとしてのかるたに流れる傾向はあったが、授業におけるアクセントとしての機能は確認できた。
- ・ 次年度はこの経験を踏まえて、私が考案し制作した越前若狭いろはかるたをメイン教材とした福井県学を行ってみたい。（膽吹覚）

## 12. 応用日本語2

- ・ 受講者：3名（中国2名、米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：山中和樹

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント
- ・ 日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

この科目は共通教育科目「応用日本語Ⅰ」との合同授業である。導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法を実施した。導入後は教材の講読、内容質問等を行った。

#### (2) 復習テスト

各回1つの記事を読み切った後、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

### (3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率（2/3以上）を満たすことを前提とし、その上で復習テストの成績と期末試験（電話応対試験）の結果をもとに、総合的に判断した。

### 3) 評価と課題

- ・ このクラスは共通教育との合同クラスである。このクラスには学部生、特別聴講生（すべて中国人）と短プロ生が混在している。この中では、中国からの特別聴講生の読解能力が一番高い。教材には振り仮名を振り、語彙表も配布しているが、非漢字圏の学生はどうしても読むスピードが遅い。しかしながら、非漢字圏の学生も含めて、短プロ生は、学習意欲が高く、授業態度もよく、成績も優秀であった。
- ・ 電話応対や名刺交換の実地練習をしたが、全体の人数が多かったので、十分とは言えなかった。(山中和樹)

## 13. 多文化コミュニケーション2

本科目の受講者なし。

## 14. 多文化コミュニケーション3

本科目の受講者なし。

## 15. 伝統産業2

「伝統産業」については、「伝統産業Ⅰ」（秋開講）か「伝統産業Ⅱ」（春開講）のどちらかを履修することになっているが、全員が「伝統産業Ⅰ」を履修したため、「伝統産業Ⅱ」の履修者はいなかった。(中島清)

## ② 2011年後期

### 《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初級1	今尾ゆき子、市村葉子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	4
日本語初級2	山中和樹、村上洋子 酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	4
日本語初級3	膽吹覚、村上洋子 酢谷尚子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	4
日本語中級(日本語B)	山中和樹	『留学生の日本語③論文読解』	1
日本語中級(日本語D)	膽吹覚	プリント	1

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語上級(日本語F)	桑原陽子	プリント	0
日本語上級(日本語H)	今尾ゆき子	『日本語上級読解』プリント	0
日本事情1	今尾ゆき子	プリント (『日本を知る』他)	0
応用日本語1	中島清	プリント	1
多文化コミュニケーション1	山中和樹	プリント	0
伝統産業1	中島清	プリント	13

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限	応用日本語1			多文化コミュニケーション1	
2限	日本語初級1	日本語初級1	日本語初級1	日本語初級1	
	日本語初級2	日本語初級2	日本語初級2	日本語初級2	
		日本事情1			
3限	日本語初級3	日本語初級3	日本語初級3	日本語初級3	伝統産業1
		日本語中級(B)			
		日本語上級(F)			
4限		日本語中級(D)			
		日本語上級(H)			

《受講者数》

科目	国名	中	イ	ア	合
	国	国	ン	メ	計
			ド	リ	
			ネ	カ	
			シ	合	
			ア	衆	
			シ	国	
			ア		
日本語初級1		3	1	0	4
日本語初級2		4	0	0	4
日本語初級3		4	0	0	4
日本語中級(日本語B/日本語D)		0	0	1	1

科目 \ 国名	中 国	イ ン ド ネ シ ア	ア メ リ カ 合 衆 国	合 計
日本語上級(日本語F/日本語H)	0	0	0	0
日本事情 1	0	0	0	0
応用日本語 1	0	0	1	1
多文化コミュニケーション 1	0	0	0	0
伝統産業 1	11	1	1	13
小計	22	2	3	27

## 《授業報告》

## 1. 日本語初級 1

- ・ 受講者：4名（漢字圏3名、非漢字圏1名、中国3、インドネシア1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：\*今尾ゆき子、市村葉子（\*コーディネーター）

## 1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級 I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

## 2) 方法

## (1) 授業方法

- ・ 原則として2課を4コマで行った。1課を1コマで導入。3コマ目に2課分の談話練習と運用練習を行い、4コマ目に復習、復習テスト実施。
- ・ 「会話」：復習の時間に14回（1～25課、5－6課除く）実施。
- ・ 「聴解」：各課「問題」の聴解部分はテープを貸し出して宿題。  
プリント（『聴解タスク25』1～17課）
- ・ 「文字・表記」：
  - ① 「ひらがな」6回、「カタカナ」5回導入（各コマ10分程度）。
  - ② 確認テスト：ひらがなテスト1（清音）、ひらがなテスト2（濁音・拗音・長音・撥音・促音）、カタカナテスト1（カタカナ→ひらがな）、カタカナテスト2（ひらがな→カタカナ）
  - ③ 「かな」導入後、談話練習と復習の時間に10分程度「語彙クイズとディクテーション」（5～25課）を21回実施。語彙クイズ6問、ディクテーション4問。

## (2) 復習テスト

- ・ 6回実施。

(3) 成績および評価

- ・ 復習テスト6回(20%)と期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

- ・ 授業開始前における「ひらがな」の習得状況は、1名が清音習得、2名が8～9割習得。2週間(6コマ)のかな文字導入期間で、3名とも清音、特殊音ともに定着。文型導入に支障がなくなった。カタカナも5コマの導入で定着。渡日が3週間遅れた1名はひらがな未習得であったが、7コマの補習授業の中でひらがな、カタカナを導入。3週間後、授業についていけるようになり、6週間後には他の学生に追いついた。
- ・ 出席、授業態度、成績とも全員きわめて優良。 (今尾ゆき子)

## 2. 日本語初級2

- ・ 受講者：4名(漢字圏4名、中国4名)
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：\*山中和樹、村上洋子、酢谷尚子(\*コーディネーター)

1) 教科書及び授業の目標

- ・ テキスト『みんなの日本語初級I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- ・ ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 授業方法

- ・ 1～3課までは1課を1コマで進めた。4課以降は1課を2コマで行った。
- ・ テキストの問題をほぼ毎回、宿題にして文法及び語彙の定着を図った。

(2) 復習テスト：4回実施(6～7課ごとに1回)

(3) ひらがな・カタカナの導入

- ・ ひらがなとカタカナは学習済みだったので、長音・促音などの指導を随時行った。

(4) ディクテーション

- ・ 各課が終了した次の回で語彙テストおよびディクテーションを行った。

(5) 評価

- ・ 復習テスト4回(20%)＋期末テスト(80%)の結果をもとに総合的に判断した。

3) 評価と課題

(1) 文型・語彙導入

- ・ 今回は学生が総じて優秀で、理解力も応用力も十分あった。

(2) 文字習得

- ・ 4名全員が既習であった。授業開始前のひらがなテスト(清音43文字)では、悪くても37点(43点満点)は取れていた。カタカナテスト(清音43文字)でも、最低でも38点は取れていた。

(3) 学生の出席率と成績



- ・ 全員、毎回出席した。
  - ・ 全員、授業態度もよく、積極的で、成績も優秀だった。
- (4) アンケート調査

- ・ 4名中2名は授業には「非常に満足」で、2名は「少し満足」との回答だった。

(山中和樹)

### 3. 日本語初級3

- ・ 受講者：4名（中国4名）
- ・ 授業時間：4コマ／週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：\* 膽吹覚、酢谷尚子、村上洋子

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅰ』25課終了（スリーエーネットワーク）  
『みんなの日本語初級Ⅱ』30課終了（同上）
- ・ 日本語の文字（ひらがなとカタカナ）と簡単な文法・語彙を学び、日本語で簡単なコミュニケーションがとれるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

- ・ PTの結果を踏まえて第10課から開始した。
- ・ 教科書は3コマで1課とし、30課まで進んだ。
- ・ 総復習を含めて5回の復習の時間を設け、学習事項の定着を図った。
- ・ 授業後半において週1コマのスピーチを導入した。スピーチ原稿のチェック、スピーチのビデオ録画による指導などでスピーチの能力の向上を図った。
- ・ 確認テストを4回実施した。

##### (2) 成績および評価

- ・ 3分の2以上の出席を前程として、期末試験とスピーチのテスト（80%）、小テスト（20%）の配分で判断した。

#### 3) 評価と課題

- ・ 期末試験の結果を見る限り、受講生が30課までの文型・語彙を確かに習得したと見てよいであろう。学生の受講姿勢も良好であった。
- ・ 今期は4名全員が中国人であったために、授業中に中国語が飛び交うことが多く、そのためか4名とも聴解力があまり向上しなかった。来春、この4名はそろって日本語初中級に進級するが、そこでは聴解力の強化に取り組みたい。

(膽吹覚)

### 4. 日本語中級（日本語B）

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数：15コマ

・ 担当教員：山中和樹

1) 教科書及び授業の目標

・ 教科書：プリントを配布

・ 擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

2) 方法

(1) 授業方法

・ この授業は共通教育科目「日本語B」との合同授業である。平均すると、大体2～3コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。

(2) 復習クイズ

2回、中間試験として実施した。

(3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率(23以上)を満たすことを前提として、その上で中間試験と期末試験の結果をもとに判断した。内訳は次のとおり。中間試験(40%)、期末試験(60%)

3) 評価と課題

この授業は共通教育科目「日本語B」との合同授業であるが、短プロの受講生は非漢字圏の出身ではあるが、漢字についてはあまりハンディを感じさせなかった。欠席が1、2回あったが、授業態度もまじめであった。プリントは雑誌に掲載されたものを使用したが、振り仮名がついていないので、漢字の読みのプリントを全員に別途配布した。(山中和樹)

## 5. 日本語中級(日本語D)

・ 受講者：1名(米国1名)

・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ

・ 担当教員：膽吹覚

1) 教科書及び授業の目標

・ 『大学で学ぶための日本語ライティング』(The Japan Times)

・ 学部の授業で求められる日本語による作文能力の向上をはかる。

2) 方法

(1) 授業方法

・ 1コマで1課のペースで進めた。具体的には教科書にそって、授業の前半部では「表現の練習」を行い、その後半部で「課題」(作文)に取り組んだ。

・ 学生が提出した作文はすべて添削し、次週の授業で個人的に始動した。

(2) 成績および評価

・ 期末試験(100%)

3) 評価と課題

・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り作文能力も向上

したといえる。

- ・ 例年後期に作文の授業を取り入れているが、それは受講者が学部生と短プロ生合わせて5名以下であることが多いからである。5名以下であれば、個別に丁寧な添削と指導が繰り返し行うことができる。作文能力の向上には、こうした丁寧な指導が必要であると考えている。

(膽吹覚)

## 6. 日本語上級（日本語F／日本語H）

本科目の受講者なし。

## 7. 日本事情 1

- ・ 受講者：4名（中国2名、米国1名、インドネシア1名）
- ・ 授業時間：1コマ／週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教材：ハンドアウト（『日本を知る—その暮らし365日—』から抜粋）、プリント  
DVD：「年中行事としきたり」、NHK録画ビデオ「ゆく年・くる年」など。
- ・ 目標：日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

- ・ ハンドアウト、DVD、ビデオなどで年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
- ・ 見学授業：福井の歴史、風土、産業を学ぶ。
  - ① 福井県立歴史博物館（10/26）  
「福井県の歴史」「昭和の暮らし」「赤」展（特別展）
  - ② 福井市立郷土歴史博物館（12/8）：  
「福井市の歴史」「参勤交代衣装の着付け体験」「養浩館」

#### ・ 体験授業

- ① 俳句大会（12/21）：  
俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同発表。
- ② かるた大会（1/18）：「越前・若狭いろはかるた」（ふくい文化研究会作成）を使用。読み札の内容（福井の名所・名産等）を事前学習の後、牧島荘にて実施。畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。

#### (2) 成績及び評価

- ・ レポート（国民の休日・見学・句作・かるた大会）：50%、期末試験：50%

### 3) 評価と課題

- ・ 出席および授業態度も良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会などのイベントは楽しんで参加した。
- ・ 「日本事情1」は共通教育の「日本事情B」（学部生12名、短期プログラムBコース6名 Aコース2名）との合同授業である。欧米系学生の積極的な授業参加の姿勢はアジア系学生に刺激を与え、文化の違いをあらためて認識させる良い機会となった。（今尾ゆき子）

## 8. 応用日本語1

- ・ 受講者：1名（米国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：15コマ
- ・ 担当教員：中島清

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教材：テレビドラマ「Beautiful Life」全11話（各45分）
- ・ 目標：最近の代表的な恋愛テレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

- ・ まず、音なし画面を見て、その状況を相手に伝える作業を通し、状況把握力を養う。次に、音声付画面を見て、聴解の練習をする。最後に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容に関する試験を行う。そして、実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

#### (2) 成績及び評価

- ・ 毎日の試験、期末試験により総合的評価する。

### 3) 評価と課題

- ・ クラス全体（27名）は出席率、授業態度ともに良好であったし、例年になく優秀な学生が多かったが、本人は比較的日本語力がまだ不十分だったため、やや苦勞していた。
- ・ 出席率も低かったため、何度か面談して精神的なサポートをした。  
1名が途中で離脱した。冬場の第1限目の授業で出席率を達成するには生活など自己管理ができないと無理がある。（中島清）

## 9. 多文化コミュニケーション1

本科目の受講者なし。

## 10. 伝統産業1

- ・ 受講生：13名（中国11、米国1、インドネシア1）
- ・ 訪問見学回数：6回（1回の見学は授業3コマ相当）

・ 担当教員：中島清

### 1) 目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関わっているのか。家内工業から出発した伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

### 2) 方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を6箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家(伝統工芸士)の話聞く。更に、研修施設での実習も行う。6回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

### 3) 評価と課題

成績評価：見学訪問先ごとに提出される報告書に基づき評価する。

- ・ 生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
- ・ 従来、バス片道1時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006年度より、見学先を福井市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみの開講となっている。

今年度は参加者が13名と少なかったため、説明や質疑応答への対応が十分にできた。

(中島清)

## 《むすび》

2011年度は、前期に中国、韓国、インドネシア、フランス、アメリカの5カ国、後期に中国、インドネシア、アメリカの3カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。

2011年前期開講科目は、「はじめての漢字」、「多文化コミュニケーション2」および新規開講の「多文化コミュニケーション3」が受講者ゼロであった。このうち「はじめての漢字」は、2010年度受け入れ学生20名のうち、初級12名中11名が漢字圏の学生であったことによる。

2011年度後期は、新規に受け入れた13名(初級：12名、中級：1名)が、それぞれの日本語力に応じて「日本語初級1」、「日本語初級2」、「日本語初級3」、「日本語中級」を受講した。中級レベルの学生が1名であったことから、「日本語上級(日本語F/H)」および日本事情科目(「日本事情1」「多文化コミュニケーション1」)の受講者がゼロとなった。

(今尾ゆき子)

### 3. 全学向け日本語コース

#### 1. 概要

本コースは本学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象として開設された日本語の補講コースである。本年度は例年通り前後期ともに日本語Ⅰ～Ⅳの4クラスを開講した。

#### 2. 開講科目と教科書

- ① 日本語Ⅰ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク）
- ② 日本語Ⅱ（前期後期共通）……『みんなの日本語初級Ⅱ』（同上）
- ③ 日本語Ⅲ（前期後期共通）……『みんなの日本語中級Ⅰ』（同上）
- ④ 日本語Ⅳ（前期）……『中級を学ぼう中級前期』（同上）  
日本語Ⅳ（後期）……『中級を学ぼう中級』（同上）

#### 3. プレースメント・テスト

前期：2011年4月15日（金） 受験者数15名

後期：2011年10月14日（金） 受験者数18名

#### 4. 継続受講者数

		日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	登録可能数	3	18	9	20	50
	登録数	3	17	7	12	39
	登録率	100	94	78	60	78
後期	登録可能数	3	16	7	17	43
	登録数	1	10	3	8	22
	登録率	33	63	43	47	51

#### 5. 受講登録者数

	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	合計
前期	6	17	6	19	48
後期	10	11	7	9	37

## 6. 授業報告

### 《前期》

#### ① 日本語 I

- ・ 受講者：3名（イラク1名、インドネシア1名、タイ1名…4月25日より受講）
- ・ 授業時間：5コマ/週 69コマ
- ・ 担当教員：高瀬公子、小野知恵美
- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）
- ・ 日本語の基本的な語彙と文法を習得し、簡単なコミュニケーションができるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業

1課を2コマで終えるペースで授業を進め、教科書の復習A～Eに合わせた復習のほか、2課または3課ごとに復習を行い、総復習の時間も合わせ計15回復習の時間を設けた。各課の進め方は、文法項目を2回に分け、1コマ目に新出語彙を導入し、2コマ目にも語彙、表現の復習を行い、定着を図った。メインテキストの他に、聴解タスク25、文型練習帳なども活用し、聞く・書く技能の向上も目指した。ひらがな、カタカナについては『ひらがな・カタカナれんしゅう』を1日1課ずつ進めた。それぞれのテストでは、特にカタカナの特殊音の書き取りが不十分であったため、その後もカタカナ語を含む文単位のディクテーションを週4日、日常よく使用するカタカナ語の復習を1日行った。

##### (2) 復習テスト・期末テスト

1～13課、14～19課、20～25課をひとまとめにして、復習テストを3回行った。テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる箇所の指導を行った。

##### (3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト各5%、期末テスト85%に換算して総合点で判断した。

#### 3) 評価と課題

受講生が3名であったため、出席者数によっては学生同士の会話が十分に練習できないこともあったが、欠席しても次の授業でフォローするなど進め方を学生の出席状況に合わせる事ができた。ただ14課以降様々な活用や文型が出てくると、1時間の欠席が大きく影響するようになり、復習時間を後半により多く設けておいた方が余裕を持って進められたのではないかとと思われる。

3名のうち2名は再履修者で、新規の学生はひらがなも未習の状態スタートしたが、皆意欲的で協力して学習に取り組み、話す・聞く・書く力とも平均して向上した。試験前もよく復習し、成績は優1名、良2名で、ほぼ授業目標が達成できたと考える。 (小野知恵美)

## ② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：17名（中国12名、フィリピン3名、ミャンマー、タイ、各1名）
- ・ 授業時間：5コマ/週 合計69コマ
- ・ 担当教員：齋藤ますみ、高瀬公子
- ・ コーディネーター：桑原陽子

### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語Ⅱ』『みんなの日本語Ⅱ文法解説書』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

### 2) 方法

#### (1) 授業方法

学習範囲は『みんなの日本語Ⅱ』の26課から50課まで、1課を2回のペースで進めた。各課の導入項目を2回に分け、その日に導入した部分の練習を行なった。理解と定着の様子を見て、会話練習まで発展させた。副教材は主に文型練習帳を使い、視聴覚教材として会話ビデオや聴解タスクも使用した。会話ビデオに関しては課終了時にほぼ毎回視聴した。2～3課毎に復習の日を設け口頭練習を中心に定着を図った。また、26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめとして復習テストを行い、前日はテスト範囲の復習に充てた。

#### (2) 漢字学習

漢字学習は漢字圏学習者と非漢字圏学習者でテキストを変えて複式で行った。非漢字圏の学習者には『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』をもとに、漢字の読みを中心に学習した。途中ユニットクイズで復習した。漢字圏の学習者には日本語能力試験2級問題を利用した。復習テスト、期末試験には10点程度の漢字の読みを出題した。

#### (3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト85パーセント、復習テスト3回各5パーセントとして判定した。

### 3) 評価と課題

今期からの試みとして漢字学習を複式で行った。これは非漢字圏の学習者の意欲を高めるといふ点で効果があったようだ。毎回の授業でも皆協力的で熱心に授業を受け、終始和やかな雰囲気の中で授業が進められた。しかしながら、週5日の授業のうち、多くの学生が週に2～3日の受講だった。そのため、学期末には学生達自身が自ら学習項目が未消化であることを自覚し、期末試験を受験せずにコースⅡに残留すると申し出る者が多く出た。結果コース登録をした17名のうち5名が期末試験を受験し、2名の合格となった。専門の授業と重なるなどで授業に出席できないという学生の現状を鑑みると、このコースを複数回受講する者が多数出るのには致し方ないのではないかと思う。



### ③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：6名（中国3名、台湾1名、韓国1名、アメリカ1名）
- ・ 授業時間：4コマ／週 55コマ
- ・ 担当教員：\*澤崎幸江、敷田紀子、酢谷尚子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語中級Ⅰ』『みんなの日本語中級Ⅰ 翻訳文法解説版』（スリーエーネットワーク）
- ・ 日本語Ⅱクラス修了者を対象に、中級前期レベルの総合的な日本語能力の向上をはかる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

1課を4コマで終えるペースで授業を進めた。まず、各課、最初の1コマ目で文法4～5項目を学習し、次の1コマで文法の残り、「話す聞く」の前半、次の1コマで「話す聞く」の残り、「読む書く」、最後の1コマで「問題」を学習した。「話す聞く」の「チャレンジしましょう」については、「問題」を学習する日に余裕があれば取り上げるという形にした。

##### (2) 漢字学習

漢字学習は『みんなの日本語Ⅱ 漢字練習帳』を使用した。フラッシュカードを使い、1日に5～6字を学習した。非漢字圏の生徒は読みを中心に学習し、漢字圏の生徒は書き学習した。復習の日もたびたび設けたが、プリントを配布し、こちらでも非漢字圏の学生は漢字の読み方を、漢字圏の学生は漢字を書かせて確認した。学習意欲を高めるために復習テスト、期末テストともに10点の漢字問題を出題したが、こちらも漢字圏の学生と非漢字圏の学生では別々の問題を出題した。

##### (3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テスト85パーセント、復習テスト3回各5パーセントとして判定した。

#### 3) 評価と課題

受講者6名のうち2名は途中で授業に来なくなったが、残りの4名は非常に意欲的に学習に取り組んでいた。4名全員が期末試験を受けたが、平均88点と非常に良い点数で、全員が優で合格した。『みんなの日本語中級Ⅰ』の教科書は内容的にボリュームがあるが、意欲的な学生のおかげで非常にスムーズに学習が進んだ。「話す聞く」の会話についても、テキストの会話を練習するだけでなく、絵だけを見て会話を作ったり、関連したロールプレイを使って発展練習をするなど、学生の学習意欲に応じて発展練習も行った。「チャレンジしよう」の作文にも取り組んだ。まとまった作文を書くのに最初は苦手意識があるようだったが、少しずつ書くのにも慣れてきた様子が見えてきた。4技能がバランスよく向上できたように思う。ただ、教科書で友達同士のくだけた会話、あまり親しくない人との敬語を使った丁寧な会話など、さまざまな会話の形を学習したが、まだ状況に応じた会話がスムーズにできるようにはなっていない。今後も引き続き練習が必要で

あろう。

(沢崎幸江)

#### ④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：19名（中国17名、米国1名、韓国1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 合計55コマ+期末試験
- ・ 担当教員：\*敷田紀子（月）、澤崎幸江（火、木）、村上洋子（水）
- ・ コーディネーター：山中和樹

##### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書と教材：『中級を学ぶ中級前期』（スリーエーネットワーク）、『語彙力ぐんぐん1日10分—中上級レベル日本語教材』（スリーエーネットワーク）ほか
- ・ 授業目標：日本語Ⅲ修了者を対象として、中級4技能の運用力を高める。

##### 2) 方法

###### (1) 授業方法

学習者に、レベル差と出席頻度の差があるため、教科書で中級の実力をつける一方で、活動というコマを設けて、学期初めの学生アンケートをもとに、担当者ごとの判断で教材を選択し読む、話す、聞くの練習を行った。教科書は1課を5コマで進み、2課ごとに復習1コマと活動1コマをはさんだ。学期半ばの7回を集中して活動に充てて授業にバラエティを持たせた。また、ほぼ毎回はじめに上記の語彙のテキストを使った。

###### (2) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テストの成績をもとにして判定した。

##### 3) 評価と課題

登録した19名中、8名が再履修者、3名が日本語Ⅲからの進級者、8名がプレースメント・テストを受けて入った大学院新生または短期プログラム生であった。週の前半、とくに月曜日は出席者が少ない傾向があった。出席者が一定しないことはレベルの性質上、毎学期繰り返される問題である。教科書は日本語Ⅲ修了者を念頭に決定したので、すでにⅣを修了した再履修者や実力のある新生には易しかった。そこで、授業では教科書の内容をこなすことだけでなく、学生のニーズに柔軟に答える努力をした。開講時に希望を聞いたところ、話すこと、聞くことの力をつけたいという回答が多かったため、授業当日の出席者の実力に応じて、臨機応変に読解、ディスカッション、会話練習、聴解練習などを取り入れた。期末試験は再履修者も含めて7名が受験した。うち3名は出席率が修了認定に満たない学生であった。修了要件を満たして合格した者は4名だったが、期末試験の得点だけでは、7名全員が合格点に達しており、このレベルの求める実力がついていることがわかった。

(敷田紀子)

## 《後期》

### ① 日本語Ⅰ

- ・ 受講者：9名（中国6名、フランス1名、インドネシア1名、マレーシア1名）
- ・ 授業時間：5コマ／週 67コマ
- ・ 担当教員：桑原陽子（コーディネーター）、澤崎幸江、敷田紀子

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅰ文法解説書』
- ・ 日本語で簡単な口頭でのコミュニケーションができるようになる。
- ・ 日本語のひらがな・カタカナの読み書きができるようになる。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

1課をおよそ2日で終えるペースで学習した。副教材として適宜聴解や文型練習プリント類を使用した。

##### (2) 復習クイズ

学生の習得状況を確認するため、3回の復習クイズを実施した。

##### (3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、復習クイズ15%と期末試験85%として評価した。

#### 3) 評価と課題

出席者の学習態度は良好であった。学期後半は天候（雪）が学生の授業出席に影響するので、スケジュールに余裕を持たせたほうがよい。また、教科書から離れた活動練習ができるとうよい。

（桑原陽子）

### ② 日本語Ⅱ

- ・ 受講者：8名（イラク、フィリピン、インドネシア各1名、タイ2名、中国3名）
- ・ 授業時間：5コマ／週 67コマ
- ・ 担当教員：高瀬公子、小野知恵美
- ・ コーディネーター：今尾ゆき子

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 『みんなの日本語初級Ⅱ』『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説』（スリーエーネットワーク）
- ・ 初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

#### 2) 方法

##### (1) 授業

1課を2コマで終えるペースで授業を進め、3課終える毎に復習の時間を設けた。復習テストの前にその範囲の復習、50課終了後に教科書の復習F～Kに合わせた総復習を行い、計13時間復習の時間を設けた。また、1月には1日2課分ずつ、26課からの新出動詞の復習も行った。

各課の進め方としては、文法項目を2回に分け、1コマ目に新出語彙を導入し、2コマ目にも語彙、表現の復習を行った。メインテキストの他に、聴解タスク25、文型練習帳なども活用し、文型、表現の定着を図った。漢字については、基本的な漢字が読めるようになることを目標とし、『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字英語版』を用いて1日5、6字ずつ読みの練習をし、2ユニット(4回分)毎に復習を行った。漢字圏の学生には、『みんなの日本語初級Ⅱ 漢字英語版』(ユニットクイズのみ)から始め、続いて『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN2 漢字』から抜粋し、読み書きの選択問題を行った。

#### (2) 復習テスト・期末テスト

26～33課、34～41課、42～50課をひとまとめにして、復習テストを3回行い、テスト後に解答、解説し、習得が不十分と思われる箇所の指導を行った。期末テストの範囲は26～48課とした。復習テスト期末テスト時に、漢字の読み問題を10問出題した。

#### (3) 成績及び評価

成績評価はセンターの規定の出席率を満たすことを前提とし、復習テスト各5%、期末テスト85%に換算して総合点で判断した。

#### 3) 評価と課題

毎回は出席できない学生を考慮して、できる限り復習を取り入れていたが、週1、2回しか出席できないような学生への対応には限界を感じた。開始時は8名が登録していたが、実験や論文等で忙しくなった学生も多く、出席する受講生は早い段階で3名になった。この3名も論文や県外の発表等で出席できない期間があったが、忙しい中も意欲的に学習を続けた。期末テストを受験したのは1名で成績は優だった。この学生は理解力に優れ、自分の勉強に意欲的なだけでなく他の学生に対しても協力的で、いい影響を与えていた。少人数ながら、クラスは和やかで熱心な雰囲気の中、学習を進めることができた。

(小野知恵美)

### ③ 日本語Ⅲ

- ・ 受講者：7名(中国6名、ロシア1名)
- ・ 授業時間：4コマ/週 合計53コマ
- ・ 担当教員：市村葉子、\*齋藤ますみ、高瀬公子
- ・ コーディネーター：膽吹覚

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『みんなの日本語 中級Ⅰ』(スリーエーネットワーク)、『みんなの日本語 中級Ⅰ 文法解説書』(スリーエーネットワーク)
- ・ 中級前期レベル者と対象にし、初級から中級への橋渡しに必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力を培う。

#### 2) 方法

##### (1) 授業

1課を6コマのペースで授業を進めた。最初の2コマはその課の文法を、次の2コマは会話

を中心に、最後の2コマは読み物を読み、その内容に関連したテーマで話したり書いたりした。復習として2課毎に計6回、教科書の問題を行った。他に3回の「活動」の時間を設けた。

#### (2) 漢字学習

漢字については各課の読解から語彙を選んでシートを作成し、漢字の読みを書く練習を繰り返し行った。

#### (3) 成績評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、期末テストで判定した。

#### 4) 評価と課題

出席率、授業に取り組む姿勢は共に良好で、和気あいあいとした雰囲気での授業が進められた。又、質問も多く、特に文法の回の時などは各学生が理解できるまで予定した項目を余す程皆積極的に質問した。そのため、全ての活動の回は遅延した項目を消化することとなった。今期から始めた漢字のシートは、コースの間繰り返し行うことによってかなりの定着が図られたと思う。しかしながら、選択した漢字の語彙数などまだまだ検討の余地があり今後の課題としたい。

(齋藤ますみ)

### ④ 日本語Ⅳ

- ・ 受講者：8名（中国8名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 53コマ
- ・ 担当教員：\*市村葉子、齋藤ますみ、酢谷尚子、村上洋子
- ・ コーディネーター：山中和樹

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『中級で学ぼう 中級中期』（スリーエーネットワーク）
- ・ 目標：使用語彙を増やす。「話す、聞く、読む、書く」の4技能の力を伸ばす。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

上記の教科書を使用し、各課で使用されるキーワード、文法項目の確認、読解、聴解問題を行い、関連読み物、時間があれば話し合いや作文を行った。各課4コマで進めた。また、授業数に余裕があったため、教科書とは独立した「活動」を11回取り入れた。活動は事前に学生から要望を聞き、ディスカッションやビデオ視聴、会話練習を行った。

##### (2) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、その上で期末試験の結果を基に授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

##### 3) 評価と課題

今期は能力試験1級合格レベルと中級レベルが半数ずつのレベル差のあるクラスであった。主教材は中級レベルの教科書を選定したが、1級を合格した受講生も中級文法、表現の復習になると概ね満足しているようであった。また、今期で大学を卒業する学生、これから就職活動を始め

る学生が多かったので、「活動」は卒業後に生かせるものを取り入れたのだが、それにより満足感が得られたという意見もあった。しかし、今年度も年が明けると出席率が下がり、期末試験を受けたのは2名であった（結果は2名とも優）。今後の課題は以下の2点である。第1に全学向けの最終クラスとしてどのように継続意欲を持たせるかという点である。学期開始時にアンケートをとり、受講者の希望にできるだけ沿った「活動」を取り入れたつもりではあるが、結果的にあまり出席率を維持することができなかった。このクラスにはN1合格を目指している学生もいるので、よりレベルの高い読解、聴解などを取り入れて対応していくこともできるだろう。第2に使用教材についてである。このクラスはゼミや実験などで出席できる曜日も固定される。今回は受講者にとって比較的易しい教科書であったため、それほど問題はなかったが、使用教材によっては欠席が増えるに従って学習が困難になり、学習意欲の低下、そしてコース不参加という悪循環に陥る可能性もある。受講者の環境、能力に応じた教材選定が必要である。（市村葉子）

## 7. むすび

日本語Ⅲの教科書を『みんなの日本語中級Ⅰ』に固定して、ようやく軌道に乗りつつあるようである。日本語Ⅰ・Ⅱとの繋がりもスムーズになり、本コース全体としてのまとまりが出来てきたように思う。その一方で日本語Ⅳは未だに問題が山積されている。登録数では20名ほどいるが、実際に授業に出席するのは2、3名であり、その2、3名も固定されておらず、シラバス通りの授業は困難である。日本語Ⅳについては、4コマ連続ではなく、技能別クラスの新設も視野に入れて、今後の検討課題とさせていただきたい。（膽吹覚）

## 4. 日本語能力試験対策講座

### 《前期》

#### ① 日本語能力試験対策講座N－1クラス

- ・ 受講者：12名（中国11、ベトナム1）
- ・ 授業時間：2コマ／週 総コマ数：30コマ
- ・ 担当教員：村上洋子
- ・ コーディネーター：山中和樹

##### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 日本語500問 上級（アスク出版）、日本語能力試験1級過去問題
- ・ 日本語能力試験N－1の合格を目指し、その為の語彙力、文法力、聴解力、読解力を養う。

##### 2) 方法

###### (1) 授業方法

テキスト「日本語500問」は、文字、語彙、文法の力をつけるために、毎週宿題とし、授業では宿題の解説やチェックテストを行い、定着を図った。その他は、特定の教科書は使わず、文字語彙、文法、聴解、読解と4つの分野を過去の問題を中心に、授業を行った。4月の初めから、週2コマの授業を行い、6月には土曜日に、2回の試験対策模擬試験と解説を行った。週1コマしか受講できない学生には昼休みを利用してチェックテストを行った。

###### (2) 成績および評価

コースとしての評価はしていないが、能力試験の結果をコピーして提出する事が義務付けられている。

##### 3) 評価と課題

プレースメントテストをして、12名の学生が登録したが、授業時間の都合でそのうちの5名が週1コマしか受講できなかった。昼休みにチェックテストを受け努力した学生2名は最後までコースを続けたが、あとの3名はだんだん授業についてくるのがむずかしくなり、途中から出席しなくなってしまった。途中であきらめてしまう学生を少なくするためにも、全員が2コマ受講できるように授業時間を設定する必要がある。 (村上洋子)

#### ② 日本語能力試験講座N－2クラス

- ・ 受講者：8名（中国7名、韓国1名）
- ・ 授業時間：4コマ／週 合計30コマ（4月～6月）
- ・ 担当教員：齋藤ますみ
- ・ コーディネーター：山中和樹

##### 1) 教材（以下のものより抜粋）

- ・ 『にほんご500問』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験1・2級 試験問題と解答』2008年度（凡人社）

- ・ 『日本語総まとめ N2 語彙編』(アスク出版)
- ・ 『日本語総まとめ N2 文法編』(アスク出版)
- ・ 『日本語能力試験 N2 模試と対策』(アスク出版)
- ・ 『日本語能力試験 N2 予想問題集』(国書刊行会)
- ・ 『合格できる日本語能力試験 N2 』(アルク)
- ・ 『パターン別 日本語能力試験2級 徹底ドリル』(アルク)

## 2) 授業方法

コース開始前にプレイズメントテストを実施した。初日にはテストの結果を踏まえ個別オリエンテーションを行い、各自自分の能力および不得意分野を認識させた。その上でクラスでしきれない漢字、聴解については参考書・問題集を紹介したり、解答の技術を紹介したりして勉強の仕方を示し、独習を促した。

ほとんどの学生が文法を苦手としていたため、コースの前半は文法およびそれに伴う語彙を中心に授業を進め、週に一回チェックテストを行なった。コースの後半では聴解問題に力を入れた。

又、試験の2週間前と1週間前に2回の聴解を含む模擬テストを実施し、その日に解答解説を行った。

## 3) 評価と課題

8名の受講者は大きなレベル差がなく、皆まじめで熱心に授業を受けた。出席率も良かった。また、週一回行った文法チェックテストの準備も欠かすことなく、回を追うごとに点数が上がっていった。2回行った模擬テストでは高得点を取る者も出た。本試験の結果が多いに期待される。

しかしながら30コマという限られた時間では、全項目を十分に授業で取り扱うことが困難であった。特に後半行った聴解の時間が不十分であり、日本滞在期間が短い学生にとっては苦勞を要した。予算や人員配置の問題があり、容易ではないことは承知の上で授業のコマ数を増やすことを課題として挙げたい。

(齋藤ますみ)

## 《後期》

### ① 日本語能力試験対策講座N-1クラス

- ・ 受講者：11名 (中国9、ベトナム1、韓国1)
- ・ 授業時間：2コマ/週 総コマ数：30コマ
- ・ 担当教員：村上洋子
- ・ コーディネーター：山中和樹

#### 1) 教科書及び授業の目標

- ・ 日本語500問 上級 (アスク出版)、日本語能力試験1級過去問題
- ・ 日本語能力試験N-1の合格を目指し、その為の語彙力、文法力、聴解力、読解力を養う。

#### 2) 方法

##### (1) 授業方法

テキスト「日本語500問」は、文字、語彙、文法の力をつけるために、毎週宿題とし、授業で



は宿題の解説やチェックテストを行い、定着を図った。その他は、特定の教科書は使わず、文字語彙、文法、聴解、読解と4つの分野を過去の問題を中心に進めた。9月の中旬から、週2コマの授業を行い、11月には土曜日に、2回の試験対策模擬試験と解説を行った。時間割の都合で週1コマしか受講できない学生のために補習授業を行った。

## (2) 成績および評価

コースとしての評価はしていないが、能力試験の結果は直接大学に報告される。

## 3) 評価と課題

プレースメントテストをして、11名の学生が登録した。授業時間の都合で授業に出席できない学生を減らすために時間割を調整したが、それでも出席できない学生がいたので、補習の授業を行った。そのため今期の学生は出席率が前回に比べて良くなった。前回のN-1のテストは、読解問題が難しく、受講した学生の読解の得点が低かったため、今回は読解に時間を割いた。しかし、2ヶ月ではなかなか読解力のレベルアップは難しく、限られた期間で読解力をどうつけるかが、今後の課題である。(村上洋子)

## ② 日本語能力試験対策講座N-2クラス

- ・ 受講者：5名（中国4名、ドイツ1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 合計30コマ（9月～11月）
- ・ 担当教員：齋藤ますみ
- ・ コーディネーター：山中和樹

### 1) 教材（以下のものより抜粋）

- ・ 『にほんご500問』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験1・2級 試験問題と解答』2008年度（凡人社）
- ・ 『日本語総まとめ N2 語彙編』（アスク出版）
- ・ 『日本語総まとめ N2 文法編』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N2 模試と対策』（アスク出版）
- ・ 『日本語能力試験 N2 予想問題集』（国書刊行会）
- ・ 『合格できる日本語能力試験 N2』（アルク）
- ・ 『パターン別 日本語能力試験2級 徹底ドリル』（アルク）
- ・ 『徹底分析 日本語能力試験 文字・語彙2級』（国書刊行会）

### 2) 授業方法

コース開始前にプレースメントテストを実施した。初日にはテストの結果を踏まえ個別オリエンテーションを行い、各自自分の能力および不得意分野を認識させた。その上でクラスできれいな漢字、聴解については参考書・問題集を紹介したり、解答の技術を紹介したりして勉強の仕方を示し、独習を促した。

ほとんどの学生が文法を苦手としていたため、コースの前半は文法およびそれに伴う語彙を中心に授業を進めた。毎回予習を前提とし、クラスでは質問を受けた上でチェックテストを行なっ

た。コースの後半では読解、聴解問題に力を入れた。

又、試験の2週間前と1週間前に2回の聴解を含む模擬テストを実施し、その日に解答解説を行った。

### 3) 評価と課題

後期のコースを希望しプレイスメントテストを受験したのは6名だった。そのうち5名が一定の点数に達し受講資格を得た。コースは受講したものの、実際に能力試験を受験したのは4名で3名が合格した。

出席率もよく予習復習をまじめにしてくる学生が多かったので文法を中心に授業を行ったが、コース終盤の模擬試験の結果からも一定の成果があったと思われる。問題は聴解力で特に9月に来日したばかりの学生にとっては難題であった。

3か月という短期間で聴解力を伸ばすのは至難の業である。今後の課題にしたい。

(齋藤ますみ)

### 《まとめ》

日本語能力試験対策講座は全学向け日本語コースと同様、単位認定を行っていない。そのため、同一時間帯に単位認定される講義が入っていれば、受講生は当然そちらを優先させなければならない。毎年、このような事情があるので、週に1回しか受講できない学生もいる。

2011年度の日本語能力試験の受験結果は次のとおり。

		対策講座受講者数	日能試受験者数	合格	不合格
前期	N-1	12	10	3	7
	N-2	8	8	6	2
後期	N-1	11	11	4	7
	N-2	5	4	3	1

(山中和樹)

## 5. 共通教育科目・日本語日本事情科目

## 《概要》

2011年度、センター教員は、センター開講科目以外に、共通教育センターが開講する基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目の日・中言語文化系及び日本語・日本文化系科目を担当した。2011年度の開講科目は以下の通りである。

## 《2011年度 開講科目一覧》

科目	開講時間	単位	担当教員
日本語科目			
日本語A	前期火 3	2	桑原陽子
日本語B	後期火 3	2	山中和樹
日本語C	前期火 4	2	山中和樹
日本語D	後期火 4	2	膽吹覚
日本語E	前期火 3	2	膽吹覚
日本語F	後期火 3	2	桑原陽子
日本語G	前期火 4	2	今尾ゆき子
日本語H	後期火 4	2	今尾ゆき子
日・中言語文化系 日本語・日本文化系科目			
応用日本語Ⅰ	前期月 2	2	山中和樹
応用日本語Ⅱ	後期月 1	2	中島清
日本の文化	前期木 1	2	膽吹覚
日本事情A	前期火 1	2	膽吹覚
日本事情B	後期火 2	2	今尾ゆき子
多文化コミュニケーションA	後期木 1	2	山中和樹
多文化コミュニケーションB	前期木 1	2	山中和樹

### <日本語A>

【受講生】11名（学部生8名、特別聴講学生3名：漢字圏9名、非漢字圏2名）

#### 【目標】

- ・ レポートの書き方を学ぶ

#### 【教材】

『中・上級者用日本語テキスト 大学で学ぶための日本語ライティング』 佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子著 The Japan Times

#### 【方法】

- ・ 教科書に沿って、レポート執筆に必要な表現や文型を学ぶ。ほぼ毎回、練習問題やレポート執筆（2回）の課題を出した。
- ・ 課題レポート(60点)と提出物・授業態度(40点)を総合的に評価した。

#### 【評価と課題】

- ・ 授業態度は非常に良好で、ほぼ全員が課題レポートにまじめに取り組んだ。
- ・ 初級文法が定着していないところがあり、毎回の課題で注意が必要であった。特に、複数の文のつながりの不自然さが目立つので、まとまった文の書き方を系統的に指導できるようシラバスを検討する必要がある。（桑原陽子）

### <日本語B>

【受講生】7名（学部生6名、特別聴講学生1名）

#### 【目標】

- ・ 擬音語・擬態語や助詞の使い分けなどに関するテーマの文章を読んで初級のまとめをし、それらを実際の作文で使用できるようにする。

【教材】プリント教材

#### 【方法】

- ・ 平均すると、大体2～3コマに1課のペースでプリント教材を読み、語句の意味や用法の確認をおこなった。
- ・ 成績評価：中間試験(40%)、期末試験(60%)

#### 【評価と課題】

- ・ この授業は短プロの中級日本語との合同授業である。7名の学生のうち、漢字圏は4名で、3名は非漢字圏である。さらに、今期の短プロの学生1名は非漢字圏である。漢字の学生であっても、正確に漢字が読めないこともあるので、漢字の読みのプリントを全員に配布した。出席と授業態度はおおむね良好（5名は100%）だったが、学部生のうち1名はコースの最初の数回出席しただけである。正規生の中には学習意欲も特別聴講生や短プロの学生と比べると劣っている者も若干見られた。
- ・ 正規生の内訳は中国3名、マレーシア2名、ベトナム1名であったが、中国人以外の学生も読解には特に問題はなかったようだ。交換留学生の1名は台湾出身。（山中和樹）

### <日本語C>

【受講生】13名（正規生4名、非正規生9名）

【目標】速読により、内容把握ができるようにするとともに、文型・会話の練習を行い、コミュニケーション能力の向上を図る。

【教材】プリント（『日本語中級用 速読文化エピソード』より）

【方法】

1日に1～2課のペースで進化した。まず、黙読により内容把握をさせたあとで、音読により、学生の問題点（漢字の読み、発音等）をチェックした。その後、文法その他の重要項目の説明を行った後、練習問題や会話練習を行った。

【評価と課題】

- ・ この授業は短期プログラムの「日本語中級」との共同授業である。中国からの特別聴講生は日本語読解能力が他の学生より高かったため、読解だけではなく、出身国の事情を紹介させるなど、対話も取り入れ、他の学生が読解以外の能力を発揮できるように工夫した。
- ・ おおむね出席状況もよく、授業態度もまじめであった。（山中和樹）

### <日本語D>

【受講者】3名（学部生2名、科目等履修生1名）

【目標】学部の授業で求められる日本語による作文能力の向上をはかる。

【教材】『大学で学ぶための日本語ライティング』（The Japan Times）

【方法】

- ・ 1コマで1課のペースに進めた。具体的には教科書にそって、授業の前半部では「表現の練習」を行い、その後半部で「課題」（作文）に取り組んだ。
- ・ 学生が提出した作文はすべて添削し、次週の授業で個人的に始動した。
- ・ 成績評価：期末試験(100%)

【評価と課題】

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り作文能力も向上したといえる。
- ・ 例年後期に作文の授業を取り入れているが、それは受講者が5名以下であることが多いからである。5名以下であれば、個別に丁寧な添削と指導が繰り返し行うことができる。作文能力の向上には、こうした丁寧な指導が必要であると考えている。（膽吹覚）

### <日本語E>

【受講者】17名（学部生12名、科目等履修生5名）

【目標】日本語上級レベルの留学生を対象として、日本語の語彙力・表現力の向上を図る。

【教材】『日常生活の分野別 日本語表現便利帳』（専門教育出版）

【方法】

- ・ 教科書第1章から第3章までを扱った。
- ・ まず語彙を導入、その用法の例文を挙げて示した。その後、教科書のタスクを課すことで、その定着を図った。
- ・ 期末試験（100%）

【評価と課題】

- ・ 受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末試験の結果を見る限り、このクラスで導入した語彙は定着できたと判断してよいであろう。
- ・ このクラスでは教科書の前半のみを扱ったが、後半は扱えなかった。教科書ではややボリュームが多かったと反省している。
- ・ 語彙の導入・定着と言う単調な授業であったが、受講生からの活発な質問によって救われた感がある。
- ・ 留学生の語彙力不足は専門教育を受けた時に大きな支障をきたす原因となる。工学系の専門教育に対応した語彙力の向上はできないか、今後も検討したい。（膽吹堂）

<日本語F>

【受講生】 23名（正規生4名、非正規生19名）

【目 標】 インターネットサイトのニュース記事・新書から時事問題を取り上げ、関連語彙・表現を学び効率よく読む技術を身につける。特に、予測して読む力をつけることを重視する。また、授業中に読んだ素材を要約する、複数記事の相違点を比較する、意見を述べる等、レポートとしてふさわしい文章を作成する。

【教 材】 ニュース記事等の生教材

【方 法】

- ・ インターネットサイトの記事・新書を素材として使用し、具体的な読みの技術を提示して読む練習を行った。必要に応じてピアリーディングを行い、回答の是非についてはクラス内で議論を行った。読解記事の要約、書き換え等の課題を課し、書く訓練を行った。
- ・ レポート課題（各10点 自由提出・最大14回）のうち得点の高い10回分を評価対象とした。

【評価と課題】

- ・ ここ数年の傾向として、正規生よりも非正規生のほうが多く、さらに日本語力も非正規生のほうが高い。本年も同様である。そのため、正規生に対する指導が不足がちになった点が問題である。（桑原陽子）

<日本語G>

【受講生】 10名（学部生4名、交換留学生6名）

【目 標】

- ・ さまざまなテーマの文章を読んで要約することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教材】 柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）、プリント

【方法】

- ・ 1課につき1コマのペースで課題文を読み、語句の意味や指示語の指示内容の確認および文章構成と内容の把握を行った。2コマ目に「内容の問題」「言葉の問題」を解くことにより文章を理解できたかどうか確認した。また、Step1の短い読み物やプリント（新聞のコラム等）も使用した。
- ・ 課毎にテキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5題、要約文(160字程度)および感想・経験等の文章作成(160字)を宿題として課し、添削後返却した。5課までは宿題の単文作成5問を全員に板書させた。
- ・ 成績評価：宿題提出(50%)、期末試験(50%)

【評価と課題】

- ・ 受講学生は学部生4名（3年生1名、2年生1名、1年生2名）と交換留学生6名で、中国8名、ベトナム1名、マレーシア1名という構成であった。本科目は短期プログラム科目の「日本語上級」と合同授業で、今回は4名の短期プログラム生が受講した。  
学部学生と交換留学生の日本語力は短期プログラムの学生よりも相対的に高く、授業内容が彼らにとっては易しすぎたきらいがある。
- ・ 出席・授業態度は良好で、宿題にもまじめに取り組んだ。その結果、短文、要約文などの作成を通じて誤用が少なくなり、文章量も多くなった。（今尾ゆき子）

<日本語H>

【受講生】 15名（学部生2、交換留学生12、日研究生1、中国12、ベトナム1、ドイツ1、メキシコ1）

【目標】

- ・ さまざまなテーマの文章を読んで要約して感想文を作成することにより、語彙力を増やすとともに読解力および文章作成力を培う。

【教材】 柿倉侑子他『日本語上級読解』（アルク）、読解プリント

【方法】

- ・ 2課を3コマのペースで課題文を読み、語句の意味の確認、文章構成・内容の把握を行った。
- ・ 課毎に、テキストの課題文から選定した重要語句を用いた短文作成5題、要約文(160字程度)および感想・経験等の文章作成(160字)を宿題とし、添削後返却した。他の学生の文を見て参考にするよい機会と考え、短作文の宿題は時々、全員に板書させて添削した。
- ・ 成績評価：出席・宿題提出(50%)、期末試験(50%)

【評価と課題】

- ・ 出席・授業態度は良好（皆出席：11名、1回欠席：2名、2回欠席：2名）
- ・ 漢字圏の学生12名と非漢字圏の学生3名の構成である。読解のテキストは漢字圏の学生にとっては簡単であるが、非漢字圏の学生には困難な部分もあった。しかし、短文や要約文、感想文などの作成において各学生はそれぞれの能力に応じて努力し、文章表現力が向上した。（今尾ゆき子）

### <日本事情A>

【受講生】21名（学部生11名、科目等履修生10名）

【目標】日本の新聞記事の読解を通して、日本社会に対する知識を広げ、理解を深める。

【教材】朝日新聞の東日本大震災関連の記事

【方法】

- ・ 前週のクラスで新聞記事（原文）、総ルビ付きの文章の2点を学生に配布し、予習を課し、その前提で授業を行なった。
- ・ 授業では学生に記事を音読させ、その後、記事の読解を行なった。読解後は記事に対する意見を求め、発話を促した。
- ・ 成績評価：期末レポート(100%)

【評価と課題】

- ・ トピックが東日本大震災ということもあってか、受講生はおおむね積極的に授業に参加しており、期末レポートでも記事に基づいて各自の意見が述べられていた。
- ・ 新聞記事を教材とする場合、トピックが最大の問題となる。今回のトピックは受講生も納得のいくものであり、かつ興味深いものであった。今後もトピックの選択に十分な注意を払いたい。  
(膽吹覚)

### <日本事情B>

【受講生】25名（学部生10名、交換留学生14名、日研生1名）

【目標】日本の社会構造や文化、日本人の考え方・価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

【教材】ハンドアウト（『日本を知る—その暮らし365日—』から抜粋）、プリント、

DVD：「年中行事としきたり」「越前・若狭いろはかるた」など

【方法】

- ・ ハンドアウト、DVD等で年中行事やしきたりについて学び、日本人の考え方を知る。
- ・ 見学授業（福井市立郷土歴史博物館、養浩館、福井県立歴史博物館）を行い福井の歴史、風土、産業について学んだ。
- ・ 俳句の成り立ちと形式を学んで各自6句の投句を課し、句会形式で合同評価した。
- ・ かるた大会（「越前・若狭いろはかるた」使用）を牧島荘にて実施。読み札の内容（福井の名所・名産等）を事前学習の後、畳の上で日本の伝統的な遊びを体験。
- ・ 成績及び評価  
レポート（国民の休日・見学・句作・かるた大会）：50%、期末試験：50%、

【評価と課題】

- ・ 学生の授業態度は熱心で出席率も良好。特に見学授業や俳句大会・かるた大会など参加型の授業を楽しみ、レポート作成も真面目に取り組んだ。
- ・ 今期は7ヵ国（中国、台湾、ベトナム、マレーシア、ドイツ、メキシコ、U.S.A.）の学生が



受講した。牧島荘の中に初めて入った学生がほとんどで、畳の上で行ったカルタゲームは新鮮で楽しかったという感想が目立った。博物館の見学、句作や「越前・若狭いろはかるた」の暗記などを通じて福井の自然、歴史、文化を学び、彼我の違いから自国の文化や価値観を再認識するようになったことを評価したい。  
(今尾ゆき子)

#### <日本の文化>

【受講生】13名（学部生8名、科目等履修生5名）

【目 標】かるたを通じて、日本文化に対する興味関心を高め、理解を深める。

【教 材】かるた各種

【方法】

- ・ 江戸いろはかるた、上方いろはかるた、百人一首、越前若狭いろはかるた、を教材として選び、日本人の思想、モラル、恋愛観、自然観、福井県の文化について、実際にカルタを使ったゲームを通して、理解を図った。
- ・ 成績評価：期末レポート(100%)

【評価と課題】

- ・ かるたを使って留学生向けの授業はできないか、という発想から始めた試作的授業であったが、おおむね受講生の理解は得られたと思われる。もちろん、ゲームとしてのかるたに流れる傾向はあったが、授業におけるアクセントとしての機能は確認できた。
- ・ 次年度はこの経験を踏まえて、私が考案し制作した越前若狭いろはかるたをメイン教材とした福井県学を行ってみたい。  
(膽吹覚)

#### <多文化コミュニケーションA（異文化コミュニケーションA）>

【受講生】37名（日本24名、中国8名、韓国3名、台湾1名、ベトナム1名、メキシコ1名）

【授業時間】1コマ/週 総コマ数：15コマ 【担当教員】山中和樹

##### 1) 目標

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

##### 2) 方法

(1) 授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とからなる。学習内容は①自己紹介、名前のつけかた、②数に関すること（ジェスチャー、吉数、凶数など）、③学生の出身国の国歌の紹介、④学生の出身国の祝祭日及び年中行事、⑤伝統的な遊び、⑥葬儀と死後の世界であった。

##### (2) 復習クイズ

復習クイズは実施していないが、「自己紹介、名前のつけかた」と「国旗・国歌について」の中間レポートを課した。

### (3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、中間レポート、期末レポート（国歌、祝祭日及び年中行事、伝統的な遊び、死後の世界についての比較）、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

### 3) 評価と課題

資料として使うCDや、プリント類が拡充してきたので、念入りに解説できるようになったが、時間配分が課題となった。今期は残念ながら、イスラム圏の学生がいなかったが、留学生の出身地が多岐にわたったので、それぞれの文化を十分比較対照することができた。（山中和樹）

## <多文化コミュニケーションB（異文化コミュニケーションB）>

【受講生】42名（日本25名、中国12名、ベトナム2名、マレーシア2名、ドイツ1名）

【授業時間】1コマ/週 総コマ数：15コマ 【担当教員】山中和樹

### 1) 目標

日本人学生と留学生との対話や質疑応答を通じて、お互いの文化について理解し、異文化との交流方法の基礎を習得する。

### 2) 方法

(1) 授業はプリントやCDを利用した講義、及び学生の発表とから成る。学習内容は①自己紹介、名前のつけかた、②学生の出身国のあいさつ、及び指を使った数の数え方、③学生の出身国の国歌の紹介、④学生の出身国の祝祭日及び年中行事、⑤伝統的な遊び、⑥死後の世界であった。

### (2) 復習クイズ

復習クイズは実施していないが、「自己紹介、名前のつけかた」についての中間レポートを課した。

### (3) 成績及び評価

成績評価は規定の出席率を満たすことを前提とした。その上で、「自己紹介、名前のつけかた」、期末レポート（国歌、祝祭日及び年中行事、伝統的な遊び、死後の世界についての比較）、出席率、授業態度等を考慮して、総合的に判断した。

### 3) 評価と課題

資料として使うCDや、プリント類が拡充してきたので、念入りに解説できるようになった。しかしながら、死後の世界についての項目は駆け足になってしまった。今回も、時間配分が課題となった。（山中和樹）

## <多文化コミュニケーションC・異文化コミュニケーションC>

【受講生】18名（日本人13名、留学生5名：中国3名、ベトナム1名、ドイツ1名）

【目 標】グループディスカッションを通して、自分自身の言語活動や文化に対する意識についての気づきを促す。

【教材】教科書は使用しなかった。

【方法】

- ・ 毎回、異なるテーマをとりあげ、グループやペアでディスカッションを行った。取り上げられたテーマは、言語使用に関わるものが中心で、敬語使用、断り、不満の表明などについて、具体的な場面を設定し「自分ならこのような場合にどう言うか・どう書くか、その理由」について内省した後、グループで意見交換を行った。
- ・ 成績評価：課題レポート（80点）と授業態度（20点）を総合的に評価した。

【評価と課題】

- ・ 日本人学生数と留学生数のバランスが悪く、当初の予定を大幅に変更する必要があった。英語が勉強できると誤解していた日本人学生もいたので、このような誤解が生じないようなシラバスの記載が必要である。
- ・ 出席者の授業態度は良好で、回を重ねるごとに、よい雰囲気でも討論することができるようになった。（桑原陽子）

## <応用日本語 I >

【受講生】25名（学部生13名、非正規生12名）

【目標】

日本経済新聞掲載「仕事常識」を通して、日本企業における職場マナーを学ぶ。また、それを通して、現代日本の社会文化を理解する視点を養うとともに、語彙力、理解力、表現力の向上を図る。

【教材】日本経済新聞土曜版掲載シリーズ「仕事常識」のプリント

【方法】

導入として、新聞記事の聴解を通して概略を把握する手法を実施した。導入後は教材の講読、内容質問等を行った。各回1つの記事を読み切り、次回にその内容に対する試験（記述試験）を実施した。試験については実施の次週に採点返却し、模範解答を配布した。

【評価と課題】

- ・ 成績評価は、実際に電話を使った電話応対試験、期末試験（筆記）、毎回の復習テストを総合評価して行った。2名は出席が2/3以下だったため、受験資格を失った。この2名は学部生である。その他の学生はおおむね出席は良好だった。授業態度も良好だった。学習意欲は例年、非正規生の方が上の印象があるが、今回も同様だった。
- ・ 資格外活動としてのアルバイトだけでなく、卒業後日本国内企業に就職する留学生の数が増えている。日本の企業文化、マナーを学ぶことにより、職場にスムーズに適應できるようさらに記事を拡充していく必要がある。
- ・ 前回の課題だった、電話応対や名刺交換の実地練習もしたが、人数が多かったので、一人あたりの練習時間はあまりとることができなかった。（山中和樹）

## <応用日本語Ⅱ>

【受講生】 27名（正規生10名、非正規生17名）

【目標】 最近の代表的な恋愛テレビドラマを通して、日本の社会、精神風土を理解すると同時に、微妙な気持ちの表現方法を学ぶ。また、教科書で学んだ日本語の応用形である、短縮形、短縮表現、音便等の理解運用力を養う。

【教材】 テレビドラマ「Beautiful Life」全11話(各45分)

【方法】 まず、音なし画面を見て、その状況を相手に伝える作業を通し、状況把握力を養う。次に、音声付画面を見て、聴解の練習をする。最後に、シナリオを配布して、理解内容、表現等を確認練習する。毎回、前回の内容に関する試験を行う。そして、実施の次週に採点返却し、模範解答を配布する。

### 【評価と課題】

- ・ 毎日の試験、期末試験により総合的評価する。全般に出席率、授業態度ともに良好であったし、例年になく優秀な学生が多かった。ただ、1名が途中で離脱した。冬場の第1限目の授業で出席率を達成するには生活など自己管理ができないと無理がある。 (中島清)

### 《まとめ》

日本語科目にもそれ以外の科目にも短期プログラム生が混在するクラスがある。

日本語科目のクラスにおいては、短期プログラム生の能力が正規生や交換留学生に及ばないケースもあり、教材が正規生などにとってはやさしすぎるきらいもあった。

一方、学習意欲については、全般的に、正規生より非正規生（交換留学生及び短期プログラム生）の方が上だったようだ。

日本語科目以外では、漢字能力や日本語能力の差が成績評価に及ぼす影響は日本語科目ほどではなかったと思う。 (山中和樹)